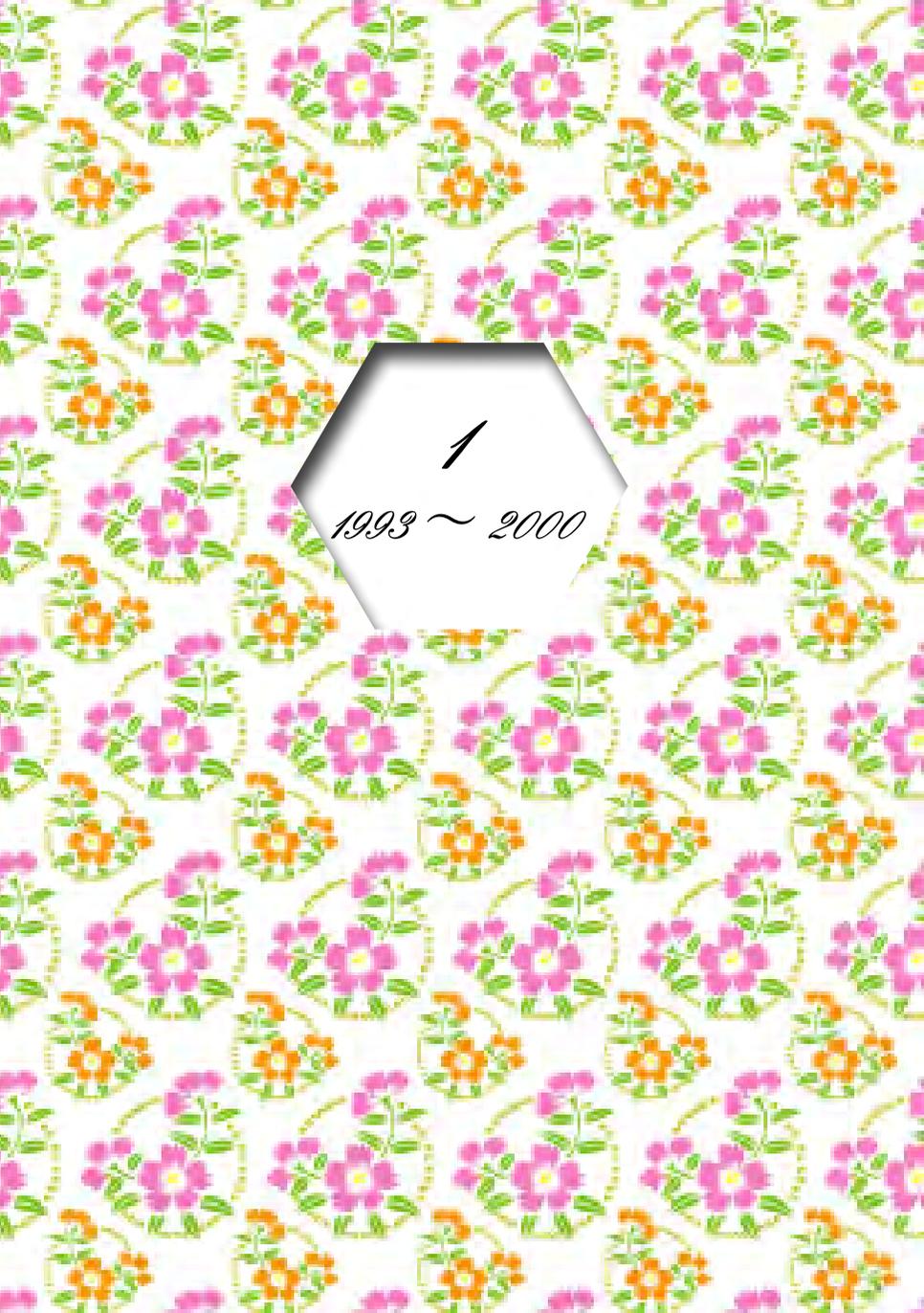


旅  
の  
途  
中

吉成美代子





*1*  
*1993 ~ 2000*

新雪富士窓に見えぬし手術待つ



せ  
か  
さ  
れ  
し  
犬  
の  
散  
歩  
の  
日  
短

電  
灯  
に  
ほ  
く  
ろ  
の  
ご  
と  
し  
冬  
の  
蠅



雪の富士てっぺんに穴韓国へ

着ぶくれてソウルの街をわけゆけり



新宿の都心見あぐる花霞

草を食む犬の背中に夏の蠅



蝸虫群蛇口廻りに炎暑来る

子の背延び浴衣のすその脛が出て



炎天やげじげじたむろす鉢の下

城下町白壁写し水澄めり



赤鳥居幾重もくぐり秋の風

巫女になりし娘にお札受く二日かな



エアコンが齒朶を丸めてゆらしけり

三宝の飾ひろひて餅の上



見違へし春のドレスの吾子がゐる

芽柳を引つぱつて人通りけり



春の蠅耳で追ひみる昼寝犬

一望の代田の中を電車行く



ハナウマ湾足をつつつく熱帯魚

嫁ぐ娘と厨に立ちし春のゆく



白い薔薇ベールに付けて風を受く

目で追ひしウエディングドレス海風に



乾杯す  
グラスの  
中に夏  
落暉

運河涼し  
対岸の  
夜景きら  
めきて



水着の子ハンバーガーをほほばりし

ミニチュアのごとき街並虹立てり



ハナウマ湾異邦人かと聞かれたり

柘榴割れ般若の面に遠からず



犬散歩片蔭に入り歩のゆるむ

虫の音や眼鏡をはづし憩ひけり



自  
転  
車  
の  
影  
長  
く  
過  
ぐ  
秋  
の  
夕

ク  
ラ  
ス  
会  
聞  
い  
て  
身  
に  
沁  
む  
話  
か  
な



一人旅の娘を案じおり木の芽かな

卒業式伸びし娘の背のめだちをり



四  
月  
寒  
階  
段  
箆  
笥  
黒  
光  
り



花  
冷  
や  
窪  
地  
に  
光  
る  
溜  
り  
水

ためらって病室に入る五月寒

スノーカー土にうづまり菜花つむ



父の日や亡き父挿せし薔薇さかり

陶房の屋根をなでゐる柳かな



S  
L  
の  
に  
ほ  
ひ  
幼  
き  
日  
の  
霞  
み



陶  
の  
里  
田  
水  
張  
る  
人  
若  
か  
ら  
ず

百色の青使ひこむ青葉かな

異国より花嫁来たり大牡丹



荒梅雨の葦のうねりの激しくて

水郷のあやめ分けいる傘の波



百千のコスモス分けて犬駆ける

霧晴るる牧の小牛の顔現れし



如露の水浴びて葉裏のバツタ飛ぶ

水車の輪くぐるトンボを目で追ひぬ



水  
温  
む  
母  
の  
背  
丈  
の  
ち  
ぢ  
ま  
り  
し



道  
灌  
も  
家  
康  
も  
み  
る  
秋  
祭

花の春息整へる天守閣

木漏日を浴びてひそかに片栗咲く



春日和カフエーに貼れる宗教画

早春や嬰の唇ずけやわらかく



分譲ののぼりはためく春の風

桜漬け都ぜんざい独り占め



春  
裕  
む  
か  
し  
の  
色  
の  
今  
に  
生  
く

春  
の  
旅  
茶  
屋  
に  
貼  
ら  
れ  
る  
芭  
蕉  
の  
句



空  
占  
め  
る  
星  
の  
輝  
き  
夏  
の  
島

庭  
木  
生  
れ  
飛  
蝗  
の  
群  
の  
透  
き  
と  
お  
る



手の動きふたつ遅れて盆踊り

まず母に聞いてほしくて墓参り



靴の紐結び直して草紅葉

北国の土塀つらなる十三夜



冬陽さすカフエの壺の唐辛子

やっと来た単線電車花の冷



春  
の  
風  
竹  
林  
動  
き  
伴  
奏  
す



義  
経  
の  
背  
く  
ら  
べ  
の  
石  
春  
時  
雨



2

2002 ~ 2007

秋  
高  
し  
千  
本  
鳥  
居  
終  
り  
あ  
り



迷ひ子の放送のあり初詣

煤払ひ濟みて一口熱きお茶



流木がいつぽん冬の瀬になじむ

親と子の影ふみごっこ松の内



寄りかかる孫温かし花の冷え

風を受け川奈の磯の栄螺とる



ばら垣や行きも帰りも廻り道

トマト咲く実になるやらならぬやら

千年の氷河を舐める日の盛り

山影の深々かかり夏炉燃ゆ



あの雲も旅の途中か夏帽子

リスもみてグリズリもみて山滴る



夕焼けてインナハーバーに日本丸

大の字に水に浮きたる赤蜻蛉



秋風や樹海暗闇皆無口

大根を煮てゐるらしい匂ひかな



看板のたふれかけたる冬野原

野ざらしの自転車埋め草枯るる



花の寺順路にありし大陶器

磁器陶器土器漆器道具店うらら



側溝に花びら寄せて疾風過ぐ

預かりし児のはや寢息春の風



箱根山歩き疲れて花空木

岩を縫ひ岩を打ちたる夏の川



対岸をS  
Lの行く  
谿若葉

夕照や  
谷川岳  
に雪残  
る



新緑や紙飛行機の高くとぶ

水騒ぐ宿のプールにみづすまし



朝市の立ちて温泉の町明易し



急坂を登り旧道花空木

箒川めぐりて憩ふ山の百合

姉の忌の又めぐりくる夾竹桃



秋  
の  
朝  
ロ  
ツ  
ジ  
和  
食  
派  
洋  
食  
派



溶  
岩  
を  
驚  
づ  
か  
み  
し  
て  
も  
み  
ぢ  
の  
根

暗闇に毒鶴茸のしろじろと

指立てて蜻蛉とまるを待つ児かな



木犀の香につつまれて一万歩

森の秋糞運びをるふんころがし



秋の空  
ビルのクレーン  
あまたある



海に向く  
お台場の二人  
月照す

花  
八  
ツ  
手  
朝  
か  
ら  
M  
R  
I  
検  
査



一  
栖  
屋  
の  
交  
互  
に  
つ  
ま  
れ  
秋  
の  
暮

クリスマスビル煌めいて新都心

さすらへる白鳩冬の駅屋下



湯の宿も茂吉の歌碑も雪の中

瓦斯灯をゆけむりよぎり細雪



石垣の荒き隙あり梅香る



竹の間の露地の行灯雪やまず

ドア開きて余寒車内に広がりぬ

つづら折峠は遙か木の芽吹く



木の芽どき鹿の刺身も天城茶屋

つる薔薇の赤く芽を出す彼岸かな



こぶしの芽紙飛行機のふわととぶ

燈台の塗り替へられて浅き春



金目鯛ななめに干され春の海

氷河より立ちたる虹のあざやかに



洞窟船水に戻され土ぼたる

吊橋の端は樹海にかくれたる



薔薇匂ふ路地出て夕のもの買ひに



炎天のエーデルワイス石に影

藁縄に結び連ねてアゴを干す

エレベーター宴歸りの薔薇匂ふ



鈍  
行  
車  
植  
田  
の  
風  
の  
心  
地  
よ  
く

日  
暮  
れ  
て  
は  
い  
よ  
い  
よ  
白  
し  
花  
十  
葉



絵日記に飛立ちさうな赤とんぼ

水着きて浸る露天の不老の湯



露天風呂海のしぶきの入りくる

森の秋去年のままに錫杖草



子が真似て一つ遅るる阿波踊

夏雲の真下に開けオホーツク



音もなく白睡蓮に風渡る

ひと巡りして草いきれ五稜郭



どこまでも真っ直ぐな道大夕焼

大輪の花点となり散る花火



ロープウェイ降りて見あぐる秋の風

夏雲の真下に展けオホーツク



暮  
れ  
て  
ゆ  
く  
湖  
の  
む  
こ  
う  
に  
秋  
灯



ど  
こ  
ま  
で  
も  
真  
つ  
直  
ぐ  
な  
道  
大  
夕  
焼

秋の昼もう一品はハムエツグ

池映る冬の紅葉の濃く淡く



径  
ま  
よ  
ひ  
表  
通  
り  
を  
探  
す  
秋



水  
ま  
き  
の  
バ  
バ  
に  
手  
を  
振  
る  
登  
園  
児



3

2008 ~ 2010

山の駅電車待つ間の地虫鳴く

雪  
静  
か  
橋  
の  
た  
も  
と  
に  
晶  
子  
の  
碑





菜の花になにかあるらし群雀

江ノ島は丸い島なり海おぼろ





手際よく天草をとる人の居て

島裏の浜大根に春はやて



海  
風  
に  
一  
瞬  
に  
飛  
ぶ  
春  
帽  
子



春  
の  
海  
よ  
り  
つ  
ぎ  
つ  
ぎ  
と  
波  
頭

童  
橋  
わ  
た  
り  
犀  
星  
の  
庭  
ざ  
く  
ら



遠  
き  
日  
の  
扇  
小  
皿  
や  
花  
の  
中



春の昼古地図でさがす竜泉寺

水音の微かにありて蚩飛ぶ





熊  
笹  
に  
添  
へ  
ば  
緑  
蔭  
深  
く  
な  
る

西  
太  
后  
の  
巡  
り  
し  
庭  
に  
酔  
芙  
蓉



兵馬備それぞれの顔夏館



古宮の麓連なる大夕焼



楊貴妃の棟々簾連ねたる

太鼓橋くぐりて涼し蘇州かな





溪流に落ち込むやうに山つつじ

春の空引裂くやうにヘリコプター





隈  
笹  
に  
添  
う  
て  
緑  
蔭  
深  
く  
な  
る

め  
ぐ  
る  
池  
水  
面  
輝  
き  
初  
蜻  
蛉



見上げれば葉がくれの枇杷撓むなり



緑蔭の風揺れてゐる昼餉かな



住居跡繁るにまかす夏の草



地  
平  
迄  
一  
本  
道  
や  
斜  
里  
の  
夏



ゆ  
く  
ほ  
ど  
に  
視  
界  
せ  
ば  
め  
て  
夏  
霧  
湧  
く



兄弟のことば  
少な  
に墓洗ふ

屈斜路湖夏うぐ  
ひすのしきり  
鳴く





日  
焼  
ま  
た  
眩  
し  
娘  
の  
帰  
国  
か  
な

大  
野  
原  
と  
ん  
ぼ  
の  
国  
に  
来  
た  
る  
ご  
と





高原の古き蕎麦屋の酔芙蓉

空の色深めて蜻蛉ふえにけり





赤とんぼ園の芝生に群なして

ロツジの径みんみん蝉と風音と





稲妻に一瞬間の動きたる

女坂通り抜けたる竹の春





回遊の鯉鮮やかに落葉船

椎の実の鬱蒼として男坂



秋  
空  
に  
白  
雲  
が  
飛  
ぶ  
愛  
宕  
山



葉  
隠  
れ  
に  
時  
を  
り  
見  
え  
て  
菊  
の  
花



山門を通り抜けたる秋の風

葬送や冬の鴉の鳴き合へり





灯  
る  
ご  
と  
人  
の  
背  
あ  
り  
酉  
の  
市

威  
勢  
よ  
く  
声  
の  
や  
り  
と  
り  
酉  
の  
市





二人ゐて一人ひとり  
の年の暮

木枯の音聞いて  
ゐる朝寝かな





煮つまりし色に木しやもじ薩摩汁

福ハ内靴の中にも豆ころぶ





ふるさとの葉缶鳴りをり寒紅梅

冬の笹さらさらさらと鳴りやまず





手のひらの葉とりどり春憂ひ

四季咲きの芙蓉次々咲きそむる



春の風引っぱって来る男の子



戸の口を花園にして春闌ける



ど  
の  
子  
に  
も  
春  
の  
来  
て  
を  
り  
ラ  
ン  
ド  
セ  
ル

子  
に  
教  
へ  
子  
に  
教  
は  
り  
て  
緑  
の  
日





ロ  
ツ  
ジ  
へ  
の  
道  
ど  
こ  
ま  
ま  
で  
も  
檜  
若  
葉

フ  
リ  
ス  
ビ  
ー  
花  
を  
揺  
ら  
し  
て  
高  
く  
飛  
ぶ





栃  
の  
花  
蝮  
注  
意  
の  
立  
看  
板

ワ  
ゴ  
ン  
車  
で  
来  
し  
釣  
人  
に  
野  
山  
吹





履きなれた靴で五月をよく歩き

子に教へ子に教はりて緑の日





さ  
ざ  
波  
の  
光  
の  
上  
に  
水  
馬

ひ  
ら  
き  
き  
り  
や  
や  
傾  
ぎ  
を  
る  
蓮  
の  
花



まだ  
雫の  
せたる  
今朝の  
蓮青葉



蓮見  
茶屋  
塀に  
乗り  
たる  
招き  
猫



つば広の帽子かぶって夏の風

蓮を見て三々五々と友ら散る





池の端めぐりて憩ふ蓮の花

道草の子の掌にかたつむり





蓮咲いて鯉のかたまる池の隅

小流れに咲きこぼれたる乱れ萩



ホ  
ー  
ム  
レ  
ス  
男  
の  
仰  
ぐ  
秋  
の  
空



大  
亀  
の  
ゆ  
っ  
く  
り  
沈  
む  
九  
月  
か  
な

秋寂し煙草をねだるホームレス



晩秋の鴉を意識して通る



秋の空  
ビルは高さ  
を競ひをり

木犀の金  
降りそそぐ  
あたりかな





少年の声つきぬけて秋桜

ピストルの音の歓声秋高し





遠  
ざ  
か  
る  
単  
線  
電  
車  
黄  
葉  
燃  
ゆ

見  
あ  
ぐ  
れ  
ば  
星  
吞  
ま  
れ  
ゆ  
く  
冬  
満  
月





児に隠れ子を叱りをる秋の薔薇

山茶花の枝混み合ひてふくらめり



冬の  
薔薇枝を  
放せば  
花こぼれ



バーベキユーの子らに  
落葉の降りやまず



寒梅の開かんとして今日もあり

山門の麓まぶしく昼の月





春の夜しづかに時間きざみゆく

手袋のときどき行方知れずなる





弟の邪険にされる大試験

少年の笑顔まぶしく桜咲く





日の透けて白梅淡い黄になれり

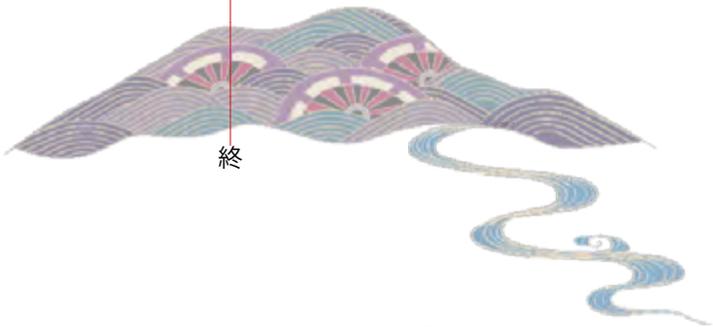
ハイファッション纏って犬の花散歩





旅の途中

終





## あを叢書 1

著者 吉成美代子

発行日 2010年9月19日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

〒164-0011 東京都中野区中央 2-50-3

電話 03-3371-4623

haisi@kagoya.net

### あを叢書について

二〇〇一年創刊の「あを」は今年で十周年を迎えました。これを記念してあを叢書とし電子出版することにいたしました。

この叢書はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。